

中央大学特定課題研究費 一研究報告書一

所属	文学部	身分	教授
氏名	緑川 晶		
NAME	MIDORIKAWA, Akira		

1. 研究課題

（和文） 質感認知の障害としての認知症理解

（英文） Disorders of qualitative recognition in person with dementia

2. 研究期間

2020・2021年度 ※2021年度は新型コロナウイルス感染症特例対応により1年間延長

3. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600字程度、英文 50word程度）

（和文）

認知症者は認知機能の低下とともに、妄想や徘徊、易怒性の亢進など様々な不適応行動を起こすことが知られているが、そのような状態を認知症の行動・心理症状（いわゆる周辺症状）と呼ばれる。周辺症状は家族などの介護者の心理的に負担感に繋がっており、その原因究明や対処は急務である。これまでのところ、このような周辺症状の背景の一つとして、認知症者が若年者と比較して他者の表情認知が異なることが知られている。一方で、認知症でなくとも高齢者は若年者と比較して他者の表情を認識に差が生じることが知られているが、どのような要因が影響するかは諸説あり、定まっていない。そこで本研究では、若年者と高齢者に対して、顔や表情の知覚・認知課題を実施し、さらに、高齢者に対しては認知機能検査とうつ病の評価スケールを実施し、これらを重回帰分析により要因を分析した。その結果、表情認知の成績が年齢、研究参加者の感情状態、および認知機能によって予測されることが明らかとなった。さらに、高齢の参加者の凡そ半数（47%）は、1つまたは複数の領域で認知機能の低下が確認されていた。これらの結果からも、高齢者を対象とした集団の年齢効果を評価する際には、軽度認知障害（MCI）などの前臨床病理学的変化を考慮することが重要である可能性が示唆された。

（英文）

We found that elderly individuals showed a decline in the recognition of emotional facial expressions. The effect of age was apparent not only compared to a young population but also relative to older subjects. In addition to the effect of age, emotional status (depressive tendencies) and cognitive function were also related to the recognition of emotional expression. It may be important to consider preclinical pathological changes, such as MCI, in evaluating the effects of age in elderly populations.